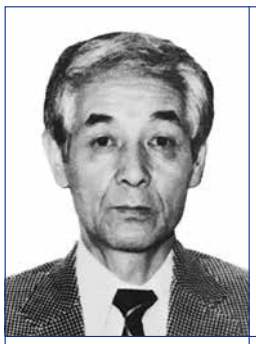


中澤　貞夫（なかざわ　さだお）

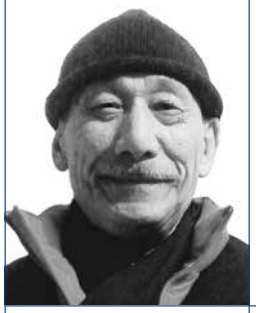
1930 ～ 2000年

都立九段中学（現九段高校）でタッチフットボール部を創設。1949年立教大に進学後、HBとして活躍。立大が確立した近代Tフォーメーションのバックスとして鋭い判断と機敏な走力で活躍。1951年、52年の関東大学リーグ優勝に貢献するとともに、両年の同リーグMVP受賞。甲子園ボウルでも1951年初出場で優勝。翌1952年も優勝。卒業後6年間立大でのコーチの後、1959年から1972年の14年間、監督としてチームを指揮。組織のまとまりを重視し、1960年、1965年には甲子園ボウルの優勝に導く。監督時代、全関東学生などの指導にもあたった。学生時代とその後の指導者としても立教黄金時代を築いた。

入澤　敏夫（いりさわ　としお）

1932年～現在

日本体育大の器械体操で活躍後、1963年、東京都立西高に赴任。1965年、西高タッチフットボール部の顧問に就任。同時に全国高等学校アメリカンフットボール連盟の活動に参加し、関東地区の高校でのアメリカンフットボール競技活動の理事、部長、理事長など、全体組織の運営に約35年間携わる。この間、神奈川地区、埼玉・茨城・千葉の組織化に貢献するとともに、高校フットボールの組織活動の強化、安全対策の推進、全国高校選手権クリスマスボウルの創設を行う。1993年日本アメリカンフットボール協会常任理事を務め、同年、永年の功績により東京都高等学校体育連盟より特別表彰を受ける。



後藤　完夫（ごとう　さだお）

1943 ～ 2018年

慶應義塾高校で競技活動を開始。慶應義塾大でRBとして活躍、1964年ハワイ遠征全日本学生チームの一員に選ばれる。「スポーツは文化」と考え、普及のため、1970年アメリカンフットボール専門誌「TOUCHDOWN」を発行人として創刊、1976年より月刊誌化、2016年10月号（568号）まで、毎月発行。同誌の編集とともに自らフットボールの技術、戦術面の記事を執筆、日本、米国のフットボールの活動を報道。1974年よりテレビ放送の解説者として活躍するとともに、1987年、春恒例となった「ヨコハマボウル」を創設。また女子タッチ、フラッグフットボールの普及等、広くアメリカンフットボール競技発展に尽くした。

板　哲夫（いた　あきお）

1948 ～ 2018年

日本大学櫻丘高校で競技活動開始、強豪校のQBとしてチームを導く。卒業後、日本大で1年はQB、2年から巧みな走法を活かしFBに転向、レギュラーとして活躍。1年、2年、4年で甲子園ボウル出場。2年で出場した第22回甲子園ボウル（1967年）では、先制TDを挙げる。また4年で出場した第24回甲子園ボウル（1969年）ではキックオフリターンのタッチダウンを挙げるなど、快足、リズミカルな動き、的確な判断で活躍、チームの副将として3年ぶりの王者となる原動力となった。1968年第21回大会から、ライスボウル3年間連続出場。卒業後、母校日本大学櫻丘高校、および日大のコーチに就任、後輩選手を育てる。

東元　春夫（ひがしもと　はるお）

1951年～現在

豊中高校で競技活動を始め、関西学院大でラインとして活躍、甲子園ボウル、ライスボウルに出場。関学卒業後、1980年から4年間米国留学。帰国後、競技規則委員就任、我が国における競技規則の制定・普及に努める。競技規則委員会副委員長を務め、その後2006年より4年間委員長として競技規則委員会を主導。米国NCAAとのコミュニケーションを図り、1985年には日本人として初めてNCAAルール委員会に参加して以来、2005年まで16回出席。またNCAAルール委員等関係者の我が国への招聘に貢献。この間、関西学連審判部の運営、および審判員として活動し、甲子園ボウル、ライスボウル等、多くのビッグゲームを担当。

松岡　秀樹（まつおか　ひでき）

1961年～現在

高校時代は野球部。1981年日本大学入学、QBとしてアメリカンフットボールを始め、入部3か月のパールボウルで勝利に導く。パスとランを兼ね備え、大試合にも動じないプレーでショットガン体形を主導する。4年連続甲子園ボウル出場。1年よりレギュラーとして活躍し、1982年、1984年の優勝に貢献。1984年にはチャック・ミルズ杯受賞。日大4年で出場した1984年度のライスボウルでは、QBとして7TDを導き、日大初優勝を遂げポール・ラッシュ杯に輝く。卒業後、レナウンに所属し、1985年度より4年間ライスボウルに出場。1985年度にはレナウンを日本一に導き、2度目のポール・ラッシュ杯受賞。

野崎　和夫（のざき　かずお）

1932年～現在

明治大時代はQBとして活躍、1955年卒。卒業後、防衛大コーチを経て1961年、下位に低迷していた明大のコーチに、翌1962年、監督に就任。チームに対する犠牲的精神と選手の意欲の向上を重視した、理論派、戦略派の指導者。1968年にはストロングTと切れの良いオプションプレーで自身の監督生活で初の、明大にとっては20年ぶりの関東大学リーグ制覇。1997年までの35年の監督時代で甲子園ボウル4回出場。監督のかたわら、全日本、全関東チームの監督、コーチを数多く歴任するとともに約50年間、十指に余る大学・社会人チームの発足、指導、コーチ派遣等を行い、幅広く普及に貢献。

倉智　春吉（くらち　はるきち）

1940年～現在

関西学院中学部のタッチフットボール部で競技活動開始。関学の中学、高校、大学と10年連続甲子園ボウル出場。大学時代は、大型FB、およびキッカーとして活躍し、ライスボウル、西宮ボウルにそれぞれ4年連続出場。1961年、関学の主将を務め、卒業後、社会人チーム、ホワイトベアーズ創部。1984年関西社会人連盟理事長に就任し、社会人チームの草分け的存在として組織化に尽力。1985年に設立された日本社会人アメリカンフットボール協会では、初代副理事長に就任するとともに、その後の1996年のXリーグ発足に寄与。2003年日本協会常務理事、2005年日本社会人協会理事長に就任。2007年日本社会人協会初代会長に就任。

喜入　博（きいれ　ひろし）

1945年～現在

都立烏山工高でタッチフットボールを経験。1965年審判活動開始。1970年より関東審判部の運営に参加。フットボール興隆期で急速に増加する試合数に対し、関東審判部の組織化と拡大に貢献、多くの施策を実行。また教育を重視、ルールの知識、適用力の向上を図る。1974年より36年間、競技規則委員会で活動、計16回の公式規則書の編集、発行の実務的責任者を務める。1992年より14年間、競技規則委員長。1989年より15回、NCAAルール委員会に出席。1991年より4年間、審判協会理事長。審判員としてライスボウル14試合等、約1500試合の審判を担当。1999年第1回ワールドカップ3位決定戦の主審を務める。

廣瀬　慶次郎（ひろせ　けいじろう）

1948年～現在

関西学院高等部でQBとして活躍、高校全国3連覇。関西学院大入学後、1年から4年まで甲子園ボウルに出場し、優勝3回。2年から正QBとして出場し、4年の第25回甲子園ボウル（1970年）では、自らのパス攻撃で大差の勝利、2年ぶりの王座奪還に寄与。卒業後、1971年関学大コーチに就任。1973年渡米し、ウェイクフォレスト大のチャック・ミルズ氏の下で同大コーチに就任、コーチのかたわら本場米国の技術、理論とコーチングを修得。帰国後、母校関学大でQBを中心に技術的な指導に貢献。1983年、関学大ヘッドコーチに就任。関学高等部の監督等を歴任するとともに、全高校選抜のヘッドコーチを務めるなど多くの後輩の指導をする。

川原　貴（かわはら　たかし）

1951年～現在

東京大学で4年間競技活動の後、コーチ、助監督。スポーツドクターとして、1990年日本協会の初めての重大事故調査を実施。以後、重症頭頸部外傷の予防、熱中症予防に積極的に取り組む。また、オリンピック、アジア大会、ユニバーシアードの日本代表選手団本部ドクターとして活躍するとともに、日本体育協会（現日本スポーツ協会）スポーツ診療所長、科学委員会委員長、JOC理事、国立スポーツ科学センター長などを歴任。2004年にはアメリカンフットボールにドーピング検査を導入し、アンチ・ドーピング活動を推進。2013年より日本協会理事、同安全対策委員会委員長として安全対策の推進に貢献。

東海　辰弥（とうかい　たつや）

1964年～現在

高校時代は野球部。1984年京都大学入学後QBとして1986年、87年と2年連続、関西学生リーグを制するとともに、甲子園ボウルで優勝（チャック・ミルズ杯を連続受賞）。両年、続くライスボウルでも勝利、2年連続日本一となり、ポール・ラッシュ杯を連続受賞。強肩からのパスと、豪快かつしなやかなスクランブルランで活躍。卒業後、アサヒビール・シルバースターに所属、1989年には東京スーパーボウルを制し、社会人チャンピオンとなり、アサヒビール初のライスボウル出場に貢献。1992年度、93年度も社会人チャンピオンとなり、ライスボウルではQBとして、両年チームを勝利に導き、自身4度目の日本一となる。